

書評

辻和彦著『その後のハックルベリー・フィン:マーク・トウェインと19世紀アメリカ社会』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Murakami, Kiyotoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9797

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



辻和彦著

『その後のハックルベリー・フィン：
マーク・トウェインと19世紀アメリカ社会』

溪水社、2001年4月発行、346頁

村上清敏

金沢大学

本書は、新進気鋭のトウェイン研究家であり本会の会員でもある、辻和彦氏の初の著書である。その全体像はタイトルからもある程度明らかではあるが、著者の言葉を借りれば、以下のような
る。

本書は……『トム・ソーヤー』と『ハックルベリー・フィン』の二つの作品の続編を取り上げ、それらの作品が持つ意味を分析、解読して「トム」と「ハック」の物語の全体像を探り、またそうすることによってこの作家の知られざる一面に光をあてることを目的として書かれている。つまりこの続編群が如何に1880年代以降のトウェインの中の人種、階級、ジェンダーに関する「社会階層意識」を映し出しているか、あるいは逆に当時のアメリカ社会、文化がどのようにトウェインという作家の創り出す言説の中で濃縮されているかという問題を究明することを主題としている。

続編群として取り上げられる具体的な作品は、「インディアンの中のハックとトム」、『トムのアフリカ探険』、『名探偵トム』、「トムの陰謀」、『アダムとイヴの日記』、「校舎の丘」、『細菌の中で三千年』などであり、アメリカ文学の一般読者にとっては決して馴染みのある作品とは言えないのだが、著者の語り口の確かさ、論の展開の明晰さに助けられて、トムとハックのその後を十分に堪能することができる。作品群を解読するに際して用いられるキーワードを列挙するなら、テリトリーとウィルダネス、スフィンクスの上の黒人、フェルプス農園再訪、陰謀と探偵、楽園・女・男、

サタンとの接触、身体と免疫などがそれであり、どれもこれも一筋縄ではゆきそうにないものばかりであるだけに、読者ははらはらどきどきしながら、著者の作品解剖の手際に目をこらし、そして、その手際の良さに目を見張ることになる。論の展開の見事さに感服するあまり、一度なら騙されてみようじゃないかという気にさせられる。読者をそういう気持ちにさせるのは、作者・作品を時代のコンテクストの中に据えよう、突き放して見ようとする著者の一貫した姿勢の背後から、作者と作品に寄せる熱い心が透けて見えるからである。今時、希有な著作と言わねばなるまい。

結論の結論にあたる部分は、これまた著者の言葉を借りるなら、以下の通りである。

「マーク・トウェイン」というアメリカ文学史の中の巨人を理解するためには、確かに『ハックルベリー・フィン』を避けて通ることはできないが、同様に『ハックルベリー・フィン』を巨視的に理解するためには、その続編群を避けることはやはりできないといえるのではないか。少なくとも漂流する筏の上の少年について発言する者は、彼がその後何処へ駆け抜けていったを見届けずに議論を押し進めるべきではないように思われるのである。

きわめて穏当な結論、つつましかたとさえ言いたくなる結論であるが、こうした結論とは裏腹に、具体的な論の展開の方は、なかなか華やかである。本誌『文学と環境』の性質上、第2章〈トリトリーとウィルダネス—「インディアンの中のハックとトム」におけるトウェインの自然観〉および第8章〈身体と免疫—『細菌の中で三千年』におけるトウェインの生命観〉が詳しく紹介するにふさわしい章かと思われるが、前者はその原型とも呼ぶべきものがすでに本誌第2号に掲載されているので、ここでは後者について、その細部に触れつつ、論旨の明晰さ、華やかさの一端を垣間見たいと思う。

第1節〈「細菌」の中のアメリカ、アメリカの

中の「細菌」〉では、『細菌の中で三千年』をトム・ハック物語の一環として読みうる可能性が示唆され、また、二十世紀初頭のアメリカにおける帝国主義の動きが作品に反映されていると主張される。第2節〈天体としての人間、管としての人体〉では、作品執筆当時のアメリカ社会の身体観に着目して、トウェインがそれを援用しつつ、それとはいかに違った価値観を合わせ持っていたかが論じられる。第3節〈自己と非自己〉では、『細菌の中で三千年』が当時の身体観をある面では凌駕して、現代の「複雑系としての身体」を先取りしているのではないかと論じられる。第4節〈宇宙論としての生命観〉では、フレキシビリティに特徴づけられる現代の身体観が作品に見られることを確認して、「身体という天体がアメリカと置換可能である、あるいは宇宙とすり置き換えられる」とする、トウェインの宇宙論としての生命観がいかに革新的であるか、その空想力が世紀を飛び越えているかが説得力をもって示される。こうした論の流れを補強するものとして引用されるのが、フレデリック・ターナー、巽孝之、スーザン・ギルマン、多田富雄、西山賢一の面々であるという華々しさである。

それでいて論が上滑りして見えないのは、論の節々で、作品からの引用が重しとして作用して、作品の綿密な読みに裏付けられた論考であることを読者に納得させるからであろう。たとえば、一例だけを挙げると、

我々の惑星には千以上の共和国と三万ほどの君主国がある。……それらはブリッオスキーの誕生の実際的一瞬间までその歴史を辿れるわけではない。というのは人間の子供は産まれたときは病原菌に汚染されていないからである。そして子供は三、四時間ほど汚染されずにいる。細菌の時間でいうと十八年から二十年ほどだ。しかしそれらは一番最初の侵略まで歴史を辿れるのだ。

という作品の引用箇所から、

ここには、生まれたばかりの新生児は細菌を持っていないという当時の科学的事実と、その身体の中に「侵入」してくる外敵としての細菌のイメージが認められる。つまり、いわばブリッソスキーの身体は未だ犯されない新大陸アメリカの雛形として描かれており……

という具合の読みを引き出して論を展開して行くあたり、氏の面目躍如たるものがあると言えよう。本書の「はじめに」において、氏は「ニュー・ヒストリシズム以降の歴史的コンテキストの中で『文学』を読み直す批評の手法を大いに参考にした」と述べているが、本書はそうした手法の援用の見事な成功例と言えるだろうし、また、そうした援用が成功するための必要条件とは何かを提示してくれているとも言えるだろう。

筆者は昔メルヴィルを少々かじった経験があり、今ではその名残は、メールアドレスに恥ずかしげもなくメルヴィルを名乗るだけという体たらくであるが、本書を読みつつ、「トム・ハック物語」に関する構想のメモがおびただしく残っていると聞かされれば、そういえば、晩年のメルヴィルも、出版のあてもない数多くの詩作品を書き散らしていたことを思い出し、また、ハウエルズに宛てた書簡の中でトウエインが「それらを執筆するには、地獄の火で炙られたペンが必要なんだ」と記していると教えられれば、メルヴィルも、誰かに宛てたどこかの手紙で『白鯨』について似たようなことを言っていたっけ、などと昔の記憶が呼び覚まされる。かように、トウエインを専門としている人々のみならず、広くアメリカの文学・文化に関心を持つ人々にお薦めしたい良書である。収録されている多くの図版が理解の助けとなり、良い意味での息抜きともなっている点も指摘しておきたい。